

フェリスにおいて受け継がれた信仰
——M.E. キダーとE.S. ブースとの対比において——

岡 部 一 興

はじめに

本稿は、「フェリス女学院に受け継がれた信仰」¹というテーマで創立者M.E. キダーと二代目校長E.S. ブースとの対比において考察しようとするものである。フェリス女学院が日本における一番古い女学校として誕生し、アメリカ・オランダ改革派の伝統を受け継いで誕生したことはよく知られているところである。しかし、その伝統がどのようなものか明らかになっていないところもあると考えられるので、あと3年弱で創立150周年を迎えるにあたり、あらためて学院のアイデンティティについて追求したいと考える。と同時に、日本キリスト教史のうえでもキダーとブースは貴重な足跡を残していると思われるので、二人を対比する中でその目的を明らかにしたいと考えるものである。

(1)

神から託された使命

まず問いたいことは、なぜキダーのようなプロテスタントの宣教師が沢山来日したのかということである。アメリカにキリスト教が伝えられた源流を考える時、宗教弾圧から逃れて、その後、キリスト教がアメリカに土着したという意味では、1620年にアメリカに渡ったピルグリム・ファーザーズ (Pilgrim Fathers) を挙げるのが適当と思われる。同年8月20日、ピルグリム・ファーザーズは、イギリスのプリマス港からメイフラワー号に102名が乗船して出発した。最終的に到着したのは、マサチューセッツのゴット岬で、同年11月9日のことであった。到着して2日後の1620年11月11日、カーヴァー、ブラッドフォード、ウインスロー、ブルースターをはじめ41人が「メイフラワー契約書」という署名を取り交わした。上陸して探検を終え、小屋の建築に取り掛かったのは12月16日の土曜日のことであったという。厳寒の地において、毎日2人、3人と死者が出て、翌年2月末までには31名が死亡、春を迎える頃には、102名のうち残ったのは50名ほどであった。それらの犠牲者の多くは、女性と子どもたちであった。このプリマス植民地は、この4年ほど前に疫病が蔓延し、インディアンがこの土地から出て所有権を主張する者がいなかったことは不幸中の幸いであった。結果的にインディアンから攻撃されることがなく定住できたからであった²。

1 本稿は2017年5月25日にフェリス女学院大学緑園キャンパスで行われた「2017年度第1回キリスト教研究所講演会」の講演内容をもとにまとめたものである。

2 石原兵永『清教徒』（山本書店、1976年）。

その後、アメリカでは独立戦争後、1803年ルイジアナ、フロリダを買収、1823年アメリカ大統領モンローがアメリカ大陸とヨーロッパ大陸との相互不干渉を説く「モンロー宣言」を発し、それによって専らアメリカ大陸内部に関心が集中、また1845年テキサスを併合し、いわゆる西漸運動が展開され、それが終りに近づくと海外に目を転じ、1898年米西戦争に勝利、フィリピン、グアム、プエルトリコを獲得、さらにこの年ハワイを併合した。1845年12月ニューヨーク『モーニング・ニュース』紙において、編集長のジョン・L・オ・サリヴァン (John L. O'Sullivan) が「テキサス併合論」において、「神がわれわれに与え給うたこの全大陸に拡大し、それを所有するという明白な運命」という論理を展開した³。年々人口が100万人増えていくなかで、神によって与えられた大陸をわれわれが拡大するのは「明白な運命」であるとし、神の摂理がそこにあるというアピールをした。またオハイオ州シンシナシティの会衆派の牧師であったジョサイア・ストロング (Josiah Strong) は『わが祖国』(1885年)を出版、ベストセラーになった。その本のなかで、「アメリカが進むが如くに世界も進む」として、非キリスト教国の国民に伝道することは神から託された使命であるとし、アメリカの政治的膨張とキリスト教の伝道が結び付けられて海外伝道が熱を帯びていった⁴。

1795年、超教派の宣教事業団であるロンドン宣教会が生まれた。その創立総会においてホーウィスが演説、未開の地に伝道に行くのは「教派」を優先するのではなく、キリストの救いを宣べ伝えたい、自らの救われた体験を伝えたいというプロテスタント伝道の特徴があらわれている。1807年ロンドン宣教会のモリソンが中国の広東に来航、この動きはアメリカに影響して、1810年ニューイングランドの会衆派教会が中心となり、アメリカ海外伝道局が結成され、1817年には長老派、オランダ改革派、連合改革派が合同海外伝道局を設立、一時アメリカン・ボードと合同するが分裂、アメリカ長老派海外伝道局を結成、他教派も続々と海外伝道局を組織化する動きが出て来る。このようにアメリカの海外伝道は19世紀初めより起こった。

ちなみに当時のアメリカの人口を見ると、1800年から南北戦争前夜までの人口の動きは500万人から3,000万人に増加している。この人口増加は西部開拓を促進、アメリカはキリスト教を喪失するのではないかという危機感があったが、逆に自分たちのアイデンティティを教会に求め、この時期にキリスト教が広まっていった。そして1800年から第2回の大覚醒が起こった。1801年ケンタッキー州の田舎町ケインリッジにおいて、野外テント集会を行い、それは1週間も続き2万数千人の参加者をみた。第2回大覚醒の中心人物はチャールズ・G・フィニーである。フィニーは、リバイバル説教者が行なうある方法を生み出した。彼が最もよく行なったものに「祭壇への召し」というものがある。これは福音の招きを受け入れるように語り、教会堂の前に進み出るように招くことをした。この招きはリバイバル説教者が行なうもので、ビリー・サンディやビリー・グラハムまで引継がれた⁵。

アメリカは19世紀前半農業国として拡大し、南北戦争後は広大な空間を工業用地として利用するようになり、そのためには鉄道の果たした役割が重要な意味を持った。アメリカの工業化は、脱農業化ではなく広大な土地による農業と相互補完的に進展し、19世紀末には世界一の工業国になっていった。1869

3 斎藤眞『アメリカ史の文脈』(岩波書店、1981年)、142頁。

4 Josiah Strong, *Our Country*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1963.

5 A.E. マクグラス『プロテスタント思想史—16世紀から21世紀まで』佐柳文男訳(教文館、2009年)。

年5月には大陸横断鉄道が開通し、サンフランシスコから日本へのルートが開けたこともあって、ここから横浜に続々と日本に宣教師がやって来たのである。1883（明治16）年4月大阪においてプロテスタント宣教協議会の総会があった。その時の議事録に収められたものが、フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史—明治初期諸教派の歩み』として翻訳されている⁶。その巻末の「来日・退任宣教師一覧表」によると、1859年から82年までに来日したプロテスタントの宣教師は209名となっている。ここで来日の人数を分析してみると、既婚男子104人、独身女性82人、独身男性23人となっている。既婚男子には同数の既婚女性宣教師が含まれるので、それに既婚女性宣教師104人を加算すると、男子が127人に対し女性は186人となり、その総数は313人になり、女性が男性宣教師を圧倒しその大半がアメリカの宣教師であった⁷。

このような流れの中でフェリスの創立者キダーがやって来る。そこで今日までフェリスを支えてきた人物は沢山いる。キダーから始まって、ブース、カイパー、オルトマンズ、シェーファー、ステゲマン、そして初代日本人校長都留仙次と沢山の校長を挙げることができる。まずキダー、ブースという形で引き継がれて安定した学校運営がなされる。しかし、関東大震災でカイパー校長が亡くなり校舎は全壊、フェリスは立ち直れるかと思われたが、見事に立ち直った。そこでは校長を支えた沢山の教職員がいる。本稿ではフェリスを創立したキダーとその次のブースを対比する形で、考察したいと考える。なぜならフェリスを生み出した母はキダー、フェリスを育てたのはブースであったと語られてきたからである。メアリが育てた若木は、学校組織に優れた才能を発揮したブースによって成長し、時代の変遷に翻弄されながら進展していったのである。

(2)

キリストの福音を伝えたい

メアリ・エディ・キダー（Mary Eddy Kidder）は、1834年1月31日バーモント州ウィングダム群ウォーズボロで父ジョン・エディ・キダーとキャサリン・ターナーの間に生まれた⁸。7人兄弟の4番目、先祖は17世紀イギリス南部からニューイングランドに移住したピューリタンであった。メアリは野鳥や動物が好きで、勉強熱心な活発な女性で、小学校を出た後、1850年に通称タウンシェンド・アカデミー（リーランド・セミナリー）に1年ほど在学、その間に回心し北ワーズボロの会衆派教会の会員になる。その後サクストン・リヴァー・アカデミーに在籍、その後1855年マンソン・アカデミーで学ぶのである。マンソンはS.R. ブラウン（Rev. Samuel Robbins Brown）が卒業した学校であった。ブラウンは来日する以前、1851年4月から59年3月にかけてニューヨーク州オーバンの近くにあるオ



メアリ・キダー（フェリス女学院資料室所蔵）

6 G.F. フルベッキ著『日本基督教会歴史資料集（8）日本プロテスタント伝道史—明治初期諸教派の歩み』。

7 同書、巻末資料（この書は、日本基督教会歴史編纂委員会によって編集された）。

8 キダーの人となりについては、小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』、鈴木美南子『フェリス女学院110年史』参照。

アスコ・アウトレットのサンド・ビーチ教会の牧師をし、同時にスプリングサイド・ボーディング・スクールをこの地に建てた。

筆者は2014年夏、オーバンでS.R. ブラウンが、来日前アメリカにおいてどのような働きをしていたかを調査するために出かけた。現在サンド・ビーチ教会の建物は残っているが礼拝は行われていない。それから少し離れた所に、その教会を引き継いだ形で改革派の教会（Owasco Reformed Church）がある。スプリングサイドの学校はホテルになっている⁹。キダーは、1856年に実母キャリンが死去、57年父親が再婚という家庭の事情が変わったこともあって、この頃このブラウンの経営するスプリングサイドの学校に赴任したのである。スプリングサイドは男子校で、キダーは少年たちを教え、ブラウンの信頼を得たのである。

この時、オーバン神学校の学生でサンド・ビーチ教会に所属していたのがフルベッキで、ブラウンの助手的存在として日曜学校をはじめとする教会のこまごまとした雑務をこなしていたと思われる。またのちにフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbek）の妻となったマニオン（Maria Manion）もいた。さらにブラウン、フルベッキと一緒に自費で来日した独身女性のエイドリانس（Caroline Adriance）もこの教会に所属していた。S.R. ブラウンの書簡によると、ミス・キダーは15年以上も親しい付き合いをし、オーバンのスプリングサイドにあるブラウンが経営する学校で数年間男子生徒の教師として雇われ、「少年指導には、まれにみる天分の持ち主」で、才能に恵まれ、人好きもよく、手腕もあり、人間を洞察する力を持っているとブラウンは言う¹⁰。

ブラウンたちが日本に向かうとキダーはここを離れ、1860年州のニュージャージー州オレンジ市の私立学校で教え、さらにブルックリンの「ミス・ラニーの学校」で教えた。1867年4月、ブラウンは山手の住宅を全焼、貸していた和訳聖書の一部の原稿を除いて全て失ったので翌5月帰国した。その後、69年6月ブラウンの娘の夫、英国領事のラウダーから書簡が届いた。ブラウンに対し1ヶ月250ドルを支給し、政府の学校の校長に就任して欲しいとの公文書であった。新潟英学校の英語教師として着任するに際し、1869年、ブラウンは女子教育と伝道の機会を待っていたキダーを同行させて新潟英学校に赴任することになった。ブラウンは、キダーについて神学博士のJ.M. フェリスあての手紙で次のように言う。「ミス・キダーは異郷の地の伝道に、すばらしく適した婦人だと思えます。異郷伝道を自ら切望してお



スプリングサイド・ボーディング・スクールとして、使用されていた建物は、現在はスプリングサイド・インというホテルとレストランとして使われている。（筆者提供）

9 調査の目的は、ニューヨーク州のオーバン市のオーバン神学校に留学した日本人を調査するためであった。オアスコ・アウトレットの改革派教会（Owasco Reformed Church）のEJ de Waard牧師を通じて、同教会員のミセス・ローレルさん（Laurel Auchampaugh）の協力を得て調査をした。またユニオン神学校のバーク・ライブラリーでも調べた。オーバン神学校に留学した日本人留学生は73名で、そのうち明治学院神学部出身者は40名に上った。拙稿「オーバン神学校に学んだ人々」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第47号（2015年）参照。

10 高谷道男『S.R. ブラウン書簡集』239頁。

り、目下わが伝道協会に日本派遣の儀を申し出ているのです。ミス・キダーが日本で女子教育をするのに十分な言語の知識を得させさえすれば、すぐにでも、なすべき仕事が見つかるでしょう。』¹¹こうして推薦状が書き添えられ、ブラウンとキダーの派遣が認められた。

では、キダー自身が海外伝道をどのように考えていたかを見ると、日本伝道の思いを次のように語っている。

「私の第一の動機は、キリストの福音を知らない人々のために役立ちたいというものです。私は伝道の仕事を愛し、多分いくつかの点でこの仕事に適していると思います。とりわけ、私は神の特別な摂理に導かれて、この仕事について考えるようになったのだと思うのです。これまで何度か外国伝道の分野で働く問題について考えました。……」¹²キダーが日本に来た第一の動機は、「キリストの福音を知らない人々のために役立ちたい」、キリストの福音を伝えたい、教育という仕事を通してキリストの愛を伝えたい、それは、神の特別な摂理に導かれたものだという信仰だった。キダーの行く道を阻むものはなく、機は熟していた。キダーはブラウンから日本行きの手紙を受け取った。「考えれば考えるほど、また祈れば祈るほど、ますます自分の仕事は日本にあり、神が私をそこに導いておられると感じたのです。私は派遣されるなら日本に行こうとすぐに決意しました」¹³。ここにキダーは、祈れば祈るほど自分の使命は日本にあり、神が私をそこに導いておられるという信仰の確信をもって、来日することになるのである。

ブラウンが最初に来日した1859年の時は、同年5月7日ニューヨークを出発、大西洋からアフリカの喜望峰を回ってきたので、179日も掛かって同年11月1日に神奈川に到着した。再来日した1869年の時は、大陸横断鉄道を使ってサンフランシスコに出て、そこから船で来ている。その船は、アメリカ船会社パシフィック・メール・スチームシップ社の経営する船舶であった。この会社は、1848年カリフォルニア金鉱発見の年に創業、ニューヨーク～パナマ地峡～サンフランシスコ航路などを経営、1867年1月政府の郵便輸送補助のもと、サンフランシスコ～横浜～香港航路を開設、便数月1回であった。この年4隻の船が作られた。この船舶は3,800～4,800総トンの木造船で、天秤ハカリと似ていることから別名「天秤船」といわれ、ビームエンジンという機械を搭載、ブラウンとキダーは外輪で航走する船舶に乗船して横浜港に着いた。

S.R. ブラウンとキダーは、1869年8月27日に横浜に到着、そして同年10月24日新潟に行き3年の契約で、ブラウンは英学校をはじめることになる。しかし、1870年6月、ブラウンは突然何の前触れもなく解雇された。その原因は自宅で聖書を講義したことが役人の反感を買い、辞任を余儀なくされたということである。ところが解雇が決まって間もなく、ブラウンのところへ横浜修文館の教師として招聘したいとの知らせを受け、横浜に赴くことになり、同年7月16日キダーと到着した¹⁴。キダーはヘボン夫人

11 同書、239頁。

12 榎本義子訳『キダー公式書簡集—ゆるぎない信仰を女子教育に』（フェリス女学院、2007年）、13頁。キダーの伝道の思いは、「キリストの福音を知らない人々のために役立ちたい」と書いているように、教育というものを通して自らが体験した福音を伝えたいというものであったと思われる。このような思いは、来日した宣教師に一般的にみられる傾向である。

13 同書、14頁。

クララの塾の女子3名と男子4名の生徒を引き継ぐことになり、住居を山手211番に定め、ヘボンの39番で9月21日から授業を開始、これがフェリス女学院の始まりである¹⁵。クララがキダーに生徒を託した事情を見ると、1870年8月1日長老派のコーンズ宣教師一家4人が横浜を訪ねるため、築地から定期蒸気船に乗船し出帆、間もなく不幸にもボイラーの爆発事故が起こった。この家族を含め16人が即死する大事故であった。その家族のうち、5月に誕生したばかりのコーンズの次男ハリーが奇跡的に助かった。ハリーはヘボン夫妻に預けられ保護されることになった。そうした事情によって、クララは自分が指導していた塾生の面倒を見ることが難しくなったので、キダーに託したということである。

ではここで、キダーの自立した生活を見てみたいと考える。それはブラウンに宛てた手紙に現れている。

「私が日本に到着してからの一年分の俸給と食費に関して、清算して頂けないでしょうか。食費の件を何故また持ち出すか、お分かりにならないかもしれませんが、私のように規則正しい習慣で育てられ、長い間一人立ちしてきた者にとっては、自分の収支や自分が何を支払うべきか何も知らないことは、非常に不愉快なことなのです。…」¹⁶

キダーの俸給は来日してからの一年間、ブラウンを通して受け取っていた。今までキダーは、自活していたのでブラウンから必要な時にお金をもらうのは、独り立ちしている人間にとっては不愉快であったのでそれを正して、直接ミッションから受取るようにならないかということであった。キダーにとっては、当たり前のことであると考えて要求したわけで、このように、キダーははっきりものをいうタイプの女性であった。

1873年7月10日、キダーはミラー（Edward Rothesay Miller）と結婚、ミラーはプリンストン神学校研究科を修了、米国長老教会海外伝道局から任命されて72年6月に来日した29歳の若い宣教師だった。彼らは急接近して結婚、教派が違うことから難しい問題が起こった。通常、教派の異なる宣教師同士が結婚した場合、男性宣教師の所属するミッションに夫人が転籍し、男性宣教師は妻帯宣教師としての俸給を受け取るようになっていた。キダーはこの考え方を追認しなかったのである。同年4月19日のJ.M.フェリスに宛てた私信には次のように書かれている。

「私はリフォーム派を離れて長老派に行きたくはありません。と申しますのは、私は改革派伝道局で仕事を始めたので、もし私が移るなら、もちろん私の学校も移るからです。ミラー氏は今まで勉学にのみ時間を費やし、まだ仕事を始めていません。私は、彼が私達の伝道局に籍を転じることができればよいと強く望んでいます。もし出来なければ、私たちはそれぞれ別々の伝道局のために働こうと考えています。このことをどうお考えになるか、どうぞお便りを下さい。そして出来る限り内密にさせていただきたいと思います。」¹⁷

キダーはそのまま改革派教会で働き、夫は来日したばかりで基盤がないので、むしろミラーの方が改革派に変わった方がよいという判断があったと思われる。ミラーは長老派ミッションから咎められないように、既婚宣教師の給料の半額を受取ることを申出た。ところが74年2月の手紙ではミラーの俸給

14 1870年7月16日、S.R. ブラウンとキダーは横浜に到着、ブラウンは日本政府からの要請で横浜修文館の責任を担った。

15 1870年9月21日、キダーは横浜居留地39番のヘボン邸で授業を開始、この日をフェリス女学院の創立としている。

16 榎本義子訳『キダー公式書簡集—ゆるぎない信仰を女子教育に』前掲書、29頁～30頁。

17 同書、71頁～72頁。

1,000ドルから、ミラー夫人がリフォームド派伝道協会から受け取る700ドルを差引いた金額、300ドルを決定してきたのである。迷惑をかけまいとした思いは打ち砕かれ、侮辱以外の何物でもないものとなった。その後、ミラーは長老派ミッションから俸給を受け取らず、自給宣教師としてキダーの仕事を手伝う形をとり、74年10月には長老派伝道局に離籍届を出すに至った。

一方、セミナーはどうなったかという点、1872年2月では13名に増え同年9月にはヘボンの39番で行っていた授業を野毛山に移した。それは大江卓県令の計らいで、県官舎の一部を借りて授業を行なうことになる。懸案だった校地問題は、なかなか解決のメドがつかなかったのである。山手178番の土地は、プラインがミッション・ホーム（現横浜共立学園）を設立するために、71年8月に貸し渡しの申請をしたが、アメリカ政府が海兵隊の病院の建設地として指定していたので獲得できなかった。ところがキダーが72年に申請したものが、74年11月2日大久保利通内務卿より貸渡証書案の認可が下りることになる（1115坪を100坪につき12ドルで借用）。かくして75年40名収容の寄宿舎も建ち、6月1日フェリス・セミナーとして出発、「フェリス」の名は校舎建築に財政的援助を惜しまなかったリホームド・ミッション総主事アイザック・フェリスとジョン・M・フェリス父子の名を記念してつけられた。その後、ミラー夫妻は79年11月休暇で帰米、81年4月日本に来るがフェリスを辞任し、伝道に専念することになる。その引き際は実に見事であったといえる。

(3)

フェリスを育てたのはブース

1881年12月E.S. ブース (Rev. Eugene Samuel Booth) が校長に就任した。ブースは1850年8月16日コネティカット州タンブルに生まれ、農家育ちの大工で、76年ラトガーズ大学卒業、79年にはニューブランズウィック神学校を卒業、同年10月4日横浜に妻エミリーと来日、同年12月8日長崎に着任、2年ほど先住宣教師スタウトの賜暇帰米中、この地方の伝道事務を担当した¹⁸。ブースの曾孫にあたるエステル・ブース・ペイジが祖父のブースを次のように言っている。

「祖父は背が低くて、がっちりとしたくましい体格で、声低い人でした。それは3人の息子たちにも受け継がれ、電話口では誰だか区別がつかないほどでした。幼い私の心に強く焼きついているのは威厳に満ちた祖父の姿です。学校では礼儀正しい生徒や先生に囲まれている祖父をよく見かけました。とてもいかめしいけれども、朗らかでやさしくて、ユーモアのある人でした。生真面目な外見ただけに意外な感じがしたものです」¹⁹。



E.S. ブース (フェリス女学院資料室蔵)

18 山本秀煌『フェリス和英女学校六十年史』（昭和6年2月）、48頁。

19 エステル・ブース・ペイジ「フェリスをめぐる人々―祖父の思い出」『あゆみ』44号（2000年）。

キダーのあとウィットベック (Emma C. Witbeck) とH.L. ウィン (Harriet Louise Winn) という女性宣教師が受け継いだが見通しは明るくなかった。1881年12月横浜に来ていたブースに2代目校長の話が持ちかけられ受諾する。ブースが校長に就任した時は、生徒数は18名ぐらいで学科の規定がない状態だった。ブースが着任した翌年1月、フェリスの語り草になっている学科課程のことがある。当時は修業年限なく、卒業したものは誰もいなかった。生徒が「何時我等は卒業できるのですかと尋ねました。そこで、博士は一人の女教師に学科課程のことを尋ねられました。すると、学科課程は有るが、えを書き記したものは無いとの事でした。それでは何処にありますかと、重ねて問ひますと、教師の頭の中にあると言ふ返事。此のやうな有様で、生徒は何年でも勉強して居ります。其中に、大抵、学問が出来ると思ふと退学して行きます。従つて卒業生などいふものが御座りませぬ」²⁰

この学科課程を米国流の教育規則書にしてエディソンの速写器で500部印刷、全国の要所に郵送し反響を呼び志願者が増えた。この時に公表した「最初の手刷規則書」には、当時の教育内容が書かれている。これは、フェリスがどのような教育を実施していたかが分かる貴重な資料である。緒言を書いたブースが言うところのことを抄録をもって見てみたい。

「緒言 (前略) 第一 女子教育ハ室家ノ和楽ヲ進ムルニ於テ大ニ力アリ、蓋シ教育ヲ蒙リタル婦女ハ其家ノ男子ニ伴ナフニ当リテハ即チ好迷良伴トナレバナリ、(中略) 家室ノ幸福ハ夫ノ母親並ニ姉妹ノ不文無学ニシテ一家ノ事務ヲモ談ジ得ザル所ノ者ニ較ブレバ遙ニ大ナリ、是レ即チ女子教育ノ致ス所ナリトス 第二 (前略) 誠ニ女子教育ハ清潔高風ノ社会ニ欠ク可ラザルー事ナリ、如何トナレバ世上何レノ邦ヲ論ゼズ女子教育ノ行ハレザル地ニ於テハ其社会ノ状態必ズ卑猥ナレバナリ、是当ニ然ルベシ如何トイフニ是ノ如キ地ニ在テハ男女ヲ合スルニ高尚ノ目的ナケレバナリ、(中略) 第三 女子教育ハ又国ノ副ナリ、若シ母タル者無学ニシテ教ヘ無レバ其子女多ク之ニ倣フ可シ、若シ之レニ反シテ母親ニ学問ノ力アル時ハ子女モ亦タ学ニ進ムベシ、抑モ人ノ子女タル者ハ皆其生長ノ後社会ニ出テ各種ノ事務ニ従フ者ナリ、而シテ其子女薫陶ハ母親ノ最モ主ル所ナリ、(中略) 然レバ則チ後日ニ至リテ人ノ母ト為ル可キ所ノ日本女子ヲ教養薫陶スルハ開化ノ極ニ達スルノ真道要路ナリト謂フベシ、(中略) 是故ニ当校ニ於テハ西洋文化ノ蘊奥ヲ教ヘ又是ト俱ニ日本支那ノ文学ヲ授ク、皆至当ノ人ヲ以テ之ヲ教授ス、(中略) イ、エス、ブース拜啓」²¹

この学科課程を米国流の教育規則書にしてエディソンの速写器で500部印刷、全国の要所に郵送し反響を呼び志願者が増えた。この時に公表した「最初の手刷規則書」には、当時の教育内容が書かれている。これは、フェリスがどのような教育を実施していたかが分かる貴重な資料である。緒言を書いたブースが言うところのことを抄録をもって見てみたい。

当時の教則は、前課一年、本課 (本科) 4、5年、後課 (高等科) 3年、前課は、小学二年生以上のものが入るもので、本課は、和漢学に熟達するものは1年余計に学ぶもので、試験は年3回、進級試験は年1回であった。ここに書かれたものは、当時フェリスの教育の内容をブースがまとめたもので、その点で教育の考え方が表れている。第一に家庭においては、妻はある種の教養が必要である。第二に女

20 山本秀煌『フェリス和英女学校六十年史』49頁。

21 『フェリス女学院150年史資料集◆第2集◆近代女子教育 新学術制までの軌跡 学校要覧・認可申請書』(フェリス女学院150年史編纂委員会、2012年)、9頁。

子教育は清潔高風の社会において必要欠くべからざるものであり、女子教育の寄宿舎が手ざまとり収容しきれなくなったので米本国に報告、増築費を請求、リフォームド婦人伝道局から資金が来て横浜在住米国人等からも寄付が来たので、1883年秋には寄宿舎が竣工、42人の収容力は90人になったのである。しかし校舎も寄宿舎も2年にして狭隘を感じるようになり、第2回の拡張を企画せざるを得ない嬉しい誤算。この年明治学院神学部を卒業した山本秀煌が教頭に就任、ブースを補佐した。生徒急増の背景にはいくつかの要因があった。第一には欧化主義の影響があり、欧化主義によって外国文化に触れることが望まれるようになった結果、ミッション・スクールがにわかに脚光を浴びた。第二には優れた教育内容にあった。官立の女学校が整備されていないこともあって、フェリスのカリキュラムが目された。第三に1883（明治16）年に起こったリバイバルと関係が深かったと思われる。1872年の横浜における初週祈禱会は、最初の日本人によるプロテスタント教会を生み出したが、またしても横浜から信仰覚醒運動というべきものが起こったのである。リバイバルの発端は、海岸教会の牧師であるバラが夢に見た不思議な羊の群れの説教がその契機になった。1883（明治16）年1月からリバイバルが横浜から起こった。その信仰の覚醒運動は次のようであった。

「横浜に於て開かれたる初週祈禱会はすこぶる活気に満ち、一週間を以て満足すること能はず、一週二週三週四週相続きて開かれ活気益々盛なりしが此恩寵は先ず東京に波及し、東京英和学校（青山学院の前身）、海岸女学校（青山学院の前身）等の生徒にして、悔改めて道を信ずるものすこぶる多く、尋で府下各派の教会に波及」していったのである²²。続いて上州安中、神戸、大阪へ、同年5月には東京で開催された大親睦においてもリバイバルが起こり、海岸教会でも急激に受洗者と教勢が伸びて行った。当時寄宿舎にいたフェリスの生徒と共立学園の生徒は、日曜日には海岸教会の礼拝に出席、フェリスの教頭だった山本秀煌が生徒を引率して礼拝に出席した。

最初このリバイバルの時期、フェリス関係者の多くが通っていた海岸教会の教勢をみると、明治15年には受洗者14名であったものが16年では83名に急上昇し、17年39名と少しダウンするが、明治18年には60名と上昇している。それが19年では一挙に144名となり、明治22年まで三桁の数字を残しているが、大日本帝国憲法発布後の明治23年になると40名まで急激に落ち込んでいく。

次にブースのフェリスに仕えた40年余りの歩みを顧みると、1881（明治14）から1922（大正11）年まで勤め、全生涯をフェリスのために捧げた。キダーがフェリス・セミナリーを立ち上げたことは画期的なことであったが、学校の施設を整備し、経営を安定化させたのはブースであった。すでに述べたように、明治10年代後半の時代は日本社会の近代化を進める時期で、積極的に西欧化した時代でもあったので生徒数が急上昇した。しかし、明治20年代になると大日本帝国憲法が施行され、教育勅語が発布されると急激にその勢いは止まって、下降線を辿るようになる。それに追い打ちをかけたのは、1899（明治32）年8月3日に公布された文部省訓令12号であった。12号は、私立学校令とともに出されたもので、「学科課程に関し法令の規定ある学校に於ては課程の外たりとも宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行ふことを許さざるべし」というものであった。当時の当局者田所美治はこれに関して次のように述べている。

22 高木壬太郎『基督教大事典』（警醒社書店、1911年）、1470頁。

「条約改正に際し外国人の内地雑居等も自然増加し、外国人が設立する私立学校も亦追々増加すべきを予想し私立学校令を制定せるが、本来宗教関係のことも私立学校令中に入れられるべき筈なりしを、引き抜いて別に訓令として発布せられものである」²³。とその公布の理由を述べている。1899（明治32）年条約改正に伴って内地雑居が許されると、キリスト教の勢力が伸長するという考え方から私立学校を管理下に置き、キリスト教の影響を排除しようとした。そして、「私立学校令」「中学校令」「高等女学校令」を発布して、宗教教育をしてはならないとした。文部省訓令12号は、全国のキリスト教学校に大きな影響を与えた。

1898（明治31）年4月第二次山県内閣のもとに第3回の高等教育會議に普通教育における宗教教育禁止条項が諮詢されると、在日の各派外国ミッションは、直ちに適切な行動をとるために特別委員会を設置し、各派の在京宣教師と日本人キリスト教指導者による学校委員会を組織した。1899（明治32）年8月3日訓令12号が公布された。日本人キリスト教指導者の反応は深刻なものではなく、明治学院の井深梶之助、青山学院の本多庸一などは、この訓令に対する危機感を抱いていないことに明治学院の宣教師インプリーは驚愕している²⁴。インプリーは井深から訓令12号は時限立法であるので、そのうちに嵐は止む、その間中学部生徒には個人的にキリスト教教育を施せばよいという楽観論を聞かされたという。その後、外国ミッションから日本のキリスト教学校に対して、訓令12号への対応が不十分であることが叫ばれ、外国公使が介入したので国際問題化し、政治外交上からも政府は対応せざるを得なくなっていた。そのような中で、キリスト教6学校代表者會議が、同年8月16日に開かれた。同志社、青山学院、明治学院、東洋英和学校、立教学校、名古屋英和学校の6校の代表者、即ち日本人代表者5名、宣教師代表12名が出席、共同声明を発することは困難と思われたが、訓令12号は憲法違反であると指摘、キリスト教主義の堅持をうたった共同声明が採択され、日本語及び英語で新聞紙上に公表された。かくて、文部大臣など、文部省幹部との交渉を通して、徴兵猶予の認可を4月には同志社普通学校が、7月には明治学院普通学部が受けた。また全国官立高等学校校長會議における入学規則改正により高等学校進学の権利を獲得した²⁵。

それに対して女学校は、男子校のように、委員会を設置して各学校が連携した動きを見ることができない。それは、男子の場合、上級学校への進学、徴兵猶予の措置がない場合、生徒がゼロになる可能性があるという危機感があったのに対し、女子校の場合は打撃は大きいものの、男子校ほど直接的な打撃がなかったことが考えられる。しかし、高等女学校にしないで各種学校に甘んじることは、様々な問題をそこに内包するものがあり、後々まで苦境に立たされることになるのである。当時のキリスト教学校の中で、この訓令12号によって消えてしまった学校も少なくなかった。キリスト教女学校の多くは各種学校になることによって、宗教教育を続けるという道をとった。フェリスもその方向を選んだのである。横浜では、共立女学校、横浜英和女学校、捜真女学校などが各種学校の道を選んだのである。フェリスの教頭であった林さだが、ブースの「追憶」を書いた文章の中に「一時は二百名以上にも昇った生徒の数が参八名に減じた」と書き記している²⁶。

23 田所美治「教育七十年を回顧して」『文部時報』第730号（文部省、1941年）、33-34頁。

24 中島耕二『近代日本の外交と宣教師』（吉川弘文館、2012年）、163頁。

25 中島耕二『近代日本の外交と宣教師』前掲書、166頁～181頁。

そして、1899（明治32）年訓令12号が出た年に高等科を廃止、同時に名称をフェリス和英女学校とし1902（明治35）年、訓令12号が出たあとに教頭として招聘された岩佐琢藏は、一番生徒が減少したときに就任し、この現象をとどめ上昇させるためにブースに色々と言進言した。1902（明治35）年から24（大正13）年まで勤めた人で、訓令12号が出た状況のなかで、学校が衰微してはいけなと高等女学校には種々の特権があるので検討したらどうかと言進言したところ、絶対に高等女学校にはしないとして断言し、ブースにはキリスト教教育を貫くとの強い考えがあった。

「日本は官尊民卑の国であり高等女学校には種々の特権がある。…各地に高等女学校が出来て、何れも満員の盛況であるのに、独り宗教学校は何れも衰微の極に沈淪し、今にも自滅せんとして居る。フェリス女学校は世の大勢に順応し、其流れに棹さすのは労少なくして功多くはないかと反問したが、校長は断じて高等女学校にはせぬ、高等女学校として科外に内証に聖書を教ふるなどの事は良心が宥さぬ、止むなくんは学校が滅亡しても宜しい。私は高等女学校とせず、単なる私立学校として雑種学校の地位にありながら、校運を隆盛ならしむることは非常の困難であると考えたが、兎も角も、勢力の続かん限り、活躍せねばならぬと考へた」²⁷。

この時教頭の岩佐は、校長より全責任を負わされた以上、どこまでもフェリスのために生涯をささげると言ってブースについていったのである。文部省訓令12号によって、高等学校及び専門学校の受験資格が取られ、徴兵猶予の特権も与えられなかった。男子のミッション・スクールのなかには、これらの特権を得るためにキリスト教主義の看板を外したところもあった。フェリスが高度の教育内容を持ちながら高等女学校にせず、各種学校のままとしたのは、他ならぬ聖書を正課として教えキリスト教教育を展開する、そこにフェリスの生きる道があると考えての決断であった。ブースがその後、どのような手を打って学校の経営安定を図っていったのかについては、稿を改めて述べたいが、概略すると1900（明治33）年に聖書科を置き、1903年英語師範科を設置、1908（明治41）年高等科を置き、全校生徒数は175名まで回復し、その後経営が安定しブース引退の頃には600名に達したのである。第二次世界大戦前においては、政府は女子のための大学を認めてこなかったが、北米六教派の海外伝道局の協力のもとに東京女子大学が教派連合大学として、1918（大正7）年に設立された。同時期にミッションの協力に基づいて男子の連合大学も構想されたが成就しなかった。1911年春、女子の連合大学設立の可能性を調査するための特別委員会が組織され、フェリスのブースが委員長になり、ブラックモア、デフォリスト、ルーミス、ミリケン、ワイドナー、ダニエルの7名が委員会を構成し、各学校に意見を正した。①女子大学設立に賛成か、②推進する組織としてキリスト教女子大学教育会を作るが、それに参加するなど意見を求めた。かくして委員会は25名の委員によって再編成され、外国人宣教師16名、日本人教育者9名で構成された。1912年12月には、調査報告書をまとめ、女子大学促進委員会として動いた。また同年12月アメリカにおいて、ハーグレイブ委員長のもとで女子大学を作る促進委員会が生まれ、翌年春に「日本におけるキリスト教女子大学の必要」と題する声明書を発表するに至った。その流れは、やがて1918年には東京女子大学への設立となっていったのである²⁸。

26 林貞子「追憶」『追憶』（フェリス同窓会、昭和7年）、12頁。

27 「岩佐沢藏先生手記」（1）『あゆみ』（フェリス女学院資料室）、40頁。

日本社会に認められる女学校

1889（明治22）年12月、フェリス・セミナリーは校名を「フェリス和英女学校」²⁹に名称変更している。ブースは機を見るに敏であった。というのは、同年2月大日本帝国憲法が公布され、天皇の絶対制が位置付けられ天皇制絶対主義体制が憲法によって明らかになり、欧化主義に対する反感が強くなり、翌年12月には教育勅語の渙発によって社会状況は一変した。前述したように生徒数を見ると、1888年には、185名いた生徒が1900年以降減少の一途をたどり、1906（明治29）では38名まで落ち込んだ。この時期の生徒の分析をすると、在学していた生徒の親は熱心なキリスト者で、生徒も苦難の時代にあって、信仰告白をしてフェリスを誇りとする生徒であったという。そのような状況において、日本の学校としてこの横浜の山手に定着させるには、日本社会に認められる学校にすることがキーポイントになった。そこにおいて、1889（明治22）年「フェリス和英学校」という校名に名称を変えることで、この山手において住民に目を向けた教育を展開しようという姿勢が校名変更から伺える。

フェリスがいかに横浜の地において女学校を定着していったかをみると、山本秀煌が書いた『フェリス和英女学校六十年史』の中に「開校五十年開校式」という記述がある。その記述の中に、フェリスの教育がどんなものであったかが端的に表われているので、見てみたい³⁰。理事長オルトマンズは、2000年の歴史を有するキリスト教の精神と2500年の歴史を有する日本の国粋との合理的調和が学校の精神であるという。彼は本校女子教育の趣旨、目的を述べた。フェリスの教育的理念は、第一に女子を教育すること。女子は男子と同じく教育を受くべき。第二にキリスト教的に女子を教育すること。教育はその根底に堅固なる、高潔なる宗教的信念の存在を必要とする。第三に本校における女子教育は、単に、キリスト教的なるに止まらず、真に日本的教育をもたらすとの確信を持つことだと言う。この学校は、日本人が教育上の主人公であり、日本人が日本女子を日本的に教育するところであって、西洋人はこれを助ける立場にある。「日本人によりて日本人の為の学校である」。これが伝道局の本懐とするところで、わが理事会の方針とするところであると述べた。

その次に校長のブースが登場した。会場にはフェリスに関係する肖像画が掲げてあった。まずジョン・フェリスがその生涯を通して一貫して本校の発展のために尽くしてくれたことを述べた。次に肖像画のエミリー・エス・ブース夫人に対し、副校長として多くの教室の業務に関係しつつ、快活に熱心に36年間の奉仕をなしたといい、ブースのフェリスでの働きに夫人が不可欠な存在であることを述べたのである。教頭の岩佐琢蔵が「ブース校長夫人を憶ふ」の追悼録を書いている。

「夫人は学校に於て聖書や文学其他の学科を受持ち忙しく働かれたのみでなく、ブース家庭の主婦と

28 大森秀子「基督女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」『キリスト教学校教育同盟百年史紀要・創刊号』（キリスト教学校教育同盟編集委員会、2003年）。なお東京女子大学は、1918年に専門学校令に基づき、東京府豊多摩郡淀橋町字角筈、現在の新宿において開学し、初代学長は新渡戸稲造であった。

29 『フェリス和英女学校六十年史』「フェリス和英女学校」の名称については、この学校の顧問兼講師であった神奈川県立師範学校教諭甫守謹吾の勧告があったと言われている。「解説 創立から関東大震災まで」『フェリス女学院15年史資料集第2集 近代女子教育新学制までの軌跡 学校要覧・認可申請書』参照フェリス女学院15年史編集委員会編、2012年。

30 山本秀煌『フェリス和英女学校六十年史』前掲書、191～195頁。

して又多くの子女の母として、活きた模範を吾儕に示されたことは、特に此処に述べなければならぬ。其故その子女は何れも立派に独立して居られる。第一子フランク君は其第二の名を母方の家名に取られた如くに其性質が夫人に似て親切な方である。その友愛の情の濃かなことは一々例を挙ぐるに堪へぬほどである」³¹。

ミセス・ブースは、副校長として授業を通して教育力を高め、生徒の動向をつかみ適切に対応し、またブース一家の生活を通して、身を以って家庭のあり方、親子のあり方を示した。ミセス・ブースは、1917(大正6)年に逝去、62年の生涯を閉じた。フェリスに仕えること36年、ミセス・ブースがミスター・ブースを支えて車の両輪がかみ合って学校運営がなされた。この地にこの種の学校を建設する動機は、何処にあるかといえば、「吾等の主イエス・キリストの偉大なる訓令、即ち、『然れば汝ら往きてもろもろの国人を教へ、……わが汝等に命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ』との任命、其の認可権を持つものであります」という。ブースの女子教育の理念は、イエス・キリストの教えに従って学校を運営することにつきる。キダーの日本女子教育は、マウント・ホリヨーク・セミナリーの設立者メリー・ライオンの教育に感化されたものと信ずると言い、その後開校50年記念を祝するとして、キダーの「徳を追慕されしを謝し」と述べた後、和英の和を先に英を後にした理由を説明した。そして、最後に「本校は日本の女子をして其身体、精神を適宜に用ひて、個人のため、家庭のため、国家のために尽くすべきことを教え、凡てのこと働きて、吾等の造物主たる神の栄光を顕はさんためである」と³²結んで、ブースの挨拶が終わった。

結びにかえて

来日した宣教師を見ると、圧倒的にアメリカの宣教師が多かったと言える。とりわけ女性の宣教師が男性を大きく上回っていた。キダーは、キリストの救いの福音を宣べ伝えたいという信仰をもって来日した。キダーがなした女子教育は、学校生活を通して女性の自立を促し、新しい自由な女性の生き方を身をもって示し、家庭の在り方と教養ある女性が家庭を築くことの大切さを教え、近代日本の教育にインパクトを与えた。当時、1870年9月21日から始まったクララ・ヘボンの塾を受け継いだキダーの塾が、フェリス・セミナリーからフェリス和英女学校と名称を変え、戦後フェリス女学院となって大学を持つ学校に発展するとは誰が考えただろうか。

続いて、キダーからバトンタッチしたブースは、夫人とともにキダーが蒔いた種を育てた。キリスト教教育を守るために、高度の教育内容を堅持しながら高等女学校とせず、各種学校に甘んじ独自の道を歩んだ。1890年代後半以降官製良妻賢母教育が整備されて行くに従い、また文部省訓令12号によってミッション・スクールはこの種の教育に押され気味になるが、各種学校に甘んじながらキリスト教教育を顕示して独自の道を歩んだ。そうしたキリスト教教育によってもたらされた教育を受けた生徒たちが、それ以後の人生を生きるうえで、また家庭を築くうえで大きな影響を与えられたと考えられる。フェリスの教育理念は、イエス・キリストの教えに裏打ちされたもので、フェリス和英女学校の校名に見ら

31 『ブース夫人記念号発刊に就て』11号(大正6年)、11頁。

32 山本秀煌『フェリス和英女学校六十年史』前掲書、193頁。

れるように、常に日本の学校としていかに社会に適合し、定着させて高いレベルの教育を提供できるかを考えていた。ブースは、教育環境を整備し、学校を組織化し、制度化し、安定化させた。生徒たちは、ブース一家の生活を見ることで家庭、夫婦、親子の在り方を自然に学んだ。生徒たちに対しては、キリストにならうものとしての生活をいかにしたら家庭に、社会に、世界に発信できるか、いかにしたら自ら考えることを実践できるかを問い掛けていたように思われる。

(おかべ・かずおき)

明治学院大学キリスト教研究所協力研究員

フェリス女学院理事